

# 言の波

発行所  
カトリック長崎大司教区  
本部事務局  
〒852-8113  
長崎市上野町10-34  
カトリックセンター内  
TEL 095(846)4246  
FAX 095(842)4460

## なぜ今、「パウロ年」なのか

### (一)

聖ペトロ・聖パウロ使徒の祭日の前日(6月28日)、世界の教会において、使徒聖パウロの生誕2000年を記念して、特別聖年「パウロ年」が始まりました。なぜ今「パウロ年」なのでしょう。パウロの遺産とは何でしょうか。今を生きるパウロであるために、私たちに求められているものは何でしょうか。

パウロは生前のキリストに出会ったことも、言葉を交わしたこともありませんでした。パウロにとってキリストはユダヤの伝統を揺るがす反愛国者に過ぎず、十字架の処刑を受けて亡くなったキリストを慕う信徒の言動は許しがたく、厳しく取り締

聖パウロ修道会司祭

山口 輝男

まるべきだと考え、彼らを捕らえていました。このパウロがダマスコでキリストの出現に接し、キリストが神であり人である世の救い主であること、復活して今も生きておられることを体験的に知りました。パウロはこのとき、キリストを宣べ伝える使徒としての使命を受けました。パウロはこの宣教の使命を守り抜きました。

彼は一つの場所に長くどまることはありませんでした。パウロの姿は宣教の旅の中にあります。宣教への熱意は私たちがパウロから引き継ぐべき一つの遺産ではないでしょうか。

### (二)

パウロは異邦人の宣教者と言われます。パウロはユダヤの域を越えて、キリストを伝えるために、全世界を走り回りました。彼はユダヤ文化の中でキリストを語るばかりでなく、その時代の文化であったギリシャ文化、3、4世紀にわたってリードしていくギリシャ文化に、キリストを受肉させようとなりました。このため、偉大な哲学者たちが教えたアテネのアレオパゴス広場で、ギリシャ人たちに彼らの言葉で、彼らの表現を用いてキリストについて語りました。日本人に対して、日本文化に対して、私たちは今日に生きるパウロであるべきではないでしょうか。

### (三)

パウロを宣教に駆り立てたものは何だったのでしょうか。それは彼のキリストへの心酔だったと言えます。パウロはその書簡で500回以上に及ぶ「神」について「キリスト」の名を380回記しています。パウロは日々、キリストを思い、キリストを感じ取り、キリストに生きました。彼はますますキリストにとらえられようとつと

めました。こうして生きているのは自分なのか、はたまたキリストなのか分からない、「私は生きています。しかし私の中に生きるのはキリストです」と言うまでになりました。またパウロは「私が知るのにはキリストです」、キリスト以外に知ることはないとも言っています。キリストを知ることの価値をパウロは深く悟り、熱意をもって宣教に一生を捧げました。

### (四)

「パウロ年」の重要な要素に、エキュメニズム(キリスト教一致)があります。パウロはダマスコで、迫害している信者の中にキリストが生きていること、キリストが教会と一体であることを諭されました。パウロはキリストに召され、アナニアを通して視力を回復し、洗礼を授けられ、按手されて教会に招き入れられました。パウロは教会が年齢・性別・民族・文化の違う人々が集うキリストの共同体であり、神秘体であること、この神秘体の中に自分が生きており、生かされていることを深く受けとめました。パウロは自分が教会を迫害した者であったことを忘れることはありませんでした。パウロはバルナバに見出され、アンチオキアの教会共

同体に招き入れられ、そこから宣教に派遣されたのですが、それまで孤独の期間を過ごしました。パウロは教会の一致、教会の温かさがどれほど大切かを体験しました。教会の最初の公会議と言われる、エルサレムの会議に出席したパウロは信仰の一致を、ことば以上に祈りをもって求めたことでしょうか。教会の一致は対話、謙虚さ、学び合うことをとおして実現するものではないでしょうか。離れている兄弟が互いに近づき、迎え合う働きを、今日私たちがどのように実行したらいいでしょうか。

くしくも今年は、ペトロ岐部と一八七殉教者の列福式という、歴史的イベントが開催されます。

パウロと同じように、キリストと一致した方々が、その生きざまと死にざまによって、キリストを証しました。

一八八名の殉教者たちと一緒に、パウロが現代によみがえり、教会のあるべき姿への復帰を迫っているように思われてなりません。

パウロも殉教者たちも迫害と被迫害、敵味方、信仰共同体と異邦の民など、さまざまな分裂要因を乗り越えて、キリストにおける一致を体験し、そのために全生涯を捧げ、証したのではないのでしょうか。



## Q&A

### 「パウロ年」

Q. いまなぜ「パウロ年」なのですか。

A. このことについては、一面にパウロ会の山口輝男神父様がしたためてくださっていますので、読んでいただければその意義が伝わってくると思います。

要するに、初代教会の功労者パウロの、生誕二〇〇〇年という節目に、パウロに倣って、現代教会の根本的使命を見直してみようというのが、主な趣旨です。

ご承知のようにパウロは、当時まだキリスト教徒という名称さえなかった頃に、そのグループの迫害者として登場します。

その彼が、ダマスコの町到達寸前に、劇的の回心をして、今度は熱烈な福音宣教師となるわけですが。

この時彼は、目から「うるこ」のようなものが落ちて（使9・18）見えるようになるのですが、そこで彼は何を見たのか、そして見えたものが彼をどのように突き動かしたのか、彼はそれをどのように説明したのか、などパウロ年に展開し、深めるべきテーマは無数にあると思います。

Q. パウロは、回心して目からうるこのようなものが落ちて、何が見えるようになったのでしょうか。

A. ご承知のように彼は、生前のイエス様に直接出会ってはいません。しかしこの時、光に打たれて盲目となり、暗闇体験を経て、目からうるこが落ちて、一言で言えば、生きておられるキリスト、すなわち復活のキリストが見えたのだと思います。

いのちそのものであるキリストに出会い、彼はいよいよそのキリストに同化していくこととなります。

その同化の度合いは「もはや生きているのは私ではない。キリストがわたしの中で生きている」（ガラチア2・20）と宣言するほどになります。

回心を体験したものの、彼は当時の教会には、にわかには受け入れられなかったこともあるでしょう。その後三年間ほど公の場には出ず、引きこもることになります。そして、三年後、自分の体験を一つのキード（鍵となることば）を用いて表現します。それは「からだ」ということばです。



Q.パウロの言う「からだ」とは何なのでしょうか。

A.言葉とは便利なようで、不自由なものもあります。「復活のキリストに出会いました」と言うだけで、その内容がこだまのように響き合うことになれば、こんなに素晴らしいことはありません。しかし普通は、こんな言葉を発しても何の反応もなく素通りされてしまいます。そこで無数の言葉を動員しなければならぬことになります。パウロも自分の驚異の体験を、分かっただけではどうしたらよいか、大いに迷ったことでしょう。

このことばつまり「からだ」に辿りつくのに三年もかかったのだからです。

これとて、完璧な言葉と言えないことを知りつつ、とつとつと語った内容が、コリントの教会へのメッセージだったのでないでしょうか。

「あなたがたはキリストの体であり、また一人ひとりはその部分です」(一コリ12:21)と。

からだの各部分は、全体につながることで、いのちを保ち、切れるといのちを失います。そしてつながると同時に、その部分独自の役割を持っています。

他の部分を持たないものを持つ部分が、その独自性を保ちながら、しかも一つになっただけです。これが復活して生きて

いるいのちとしてのキリストご自身です。

わたしたちはよく教会に行き、よく祈ります。しかし時々、その信仰行為の驚嘆すべき意義を見失ってしまう場合があります。

人知れず行われる、一つひとつの信仰行為が、キリストの体の部分としてなされるわけですから、それは、すなわちキリストの行為となり、世界のだれかを救い上げているのです。わたしたちは、一人で世界を救うことのできる救い主でもあることになります。

そのことを世界の完成の日、いや応なく知るようになるだろうと、キリストご自身が宣言しておられる(マタイ25章)わけですが、いまそれを知り、からだ全体で知ることが出来たら、それこそ鳥肌立つような信仰のよるこびが湧き上がってくるでしょう。パウロの回心とは、そのような内容を含むものだったのではないのでしょうか。

Q.パウロは、イエス・キリストを知ること、キリストについていろいろな教えやその掟を知ることとは、区別していたように思いますが・・・

A.現代の宣教を進めていくうえで、そのこの見極めこそ大事なことです。

パウロ自身のことばによれば「人間は律法に定められたことを行うことによってではなく、イエス・キリストへの信仰によるのでなければ」(ガラ2:16)正しい者と

されないのです。

マリア・マグダレナは、復活のキリストに出会い、熱烈な信仰と愛を持って生きる者となりましたが、カトリック要理や整理された掟などの知識はありませんでした。

いま知識偏重になり過ぎて、洗礼を受けるための条件が、知識を持っているかないかで判断され、肝心のイエス様との人格的関わりはあまり重要なこととして問われないとすれば、それは本末転倒と言わざるを得ません。

生き生きとした人格のかかわりは直接みことば(聖書)を味わうことから湧き上がってきます。

ともにみことばに向かい合い、分かち合うところから「宣教」と言うより「宣共」ともいべき信仰形態の変革を目指したいものです。ペトロ・岐部と一八七殉教者列福式への準備もいよいよ熱を帯びてきています。

はじめの頃は、様々な責め苦を勇敢に耐えた、殉教者の死にざまに、目が注がれていたように思います。

それからその生きざま全体、つまりその生涯全体、人間全体で殉教者だった、という視点にも黙想の範囲は広がっています。

さらにその想いは深まって、迫害・被害、敵・味方など、現代社会そのものが悩まされているテーマを克服した殉教者の姿が、浮き彫りにされつつあります。教会と異邦の世界の境をのり超えた、パウロのテーマとも呼応するものです。

## 新しい要理

## 「共に歩む旅」

(13)

## 第十一課 「見捨てられた人々」

【進行係】(参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める)

「どなたか祈りでイエス様をこの席に招いてくださいませんか。」

## A. 私たちの生活

私たちの周囲を見まわして見れば、見捨てられた(じゃま者扱いされた)と感じている人たちがたくさんいます。

## 【進行係】

「下の写真を見てみましょう」

【進行係】(参加者たちに質問をする)

①写真を見ながら、感じたことなどを話し合ってみましょう。

②私たちの家庭、隣人、社会から



無視され見捨てられた人たちは誰であり、その人たちの気持ちはどんなものか考えたことがありますか。

## B. 神のことば

イエス様の生まれた時代には重い皮膚病は、不治の病でした。重い皮膚病は、体の組織を壊し、結局は生命までも奪っていく恐ろしい病としてとらえられていました。その

うえこの病にかかった人は罪人として扱われ、共同体から隔離され、家族や隣人たちからも見捨てられていました。ところがイエス様は彼らを受け入れ、治してくださいました。

## 【進行係】

「どなたか、マタイ8、1・4(重い皮膚病患者をなおされた)イエスを読んでくださいませんか」

【進行係】「ほかの方がもう一度読んでくださいませんか」

## 【進行係】

①今読んだ聖書の中で、心に響い

た単語あるいは一節を選んで、大きな声で祈るように、3回読んでくださいませんか。  
(同じ箇所を3回繰り返す間は、沈黙をお守りください)

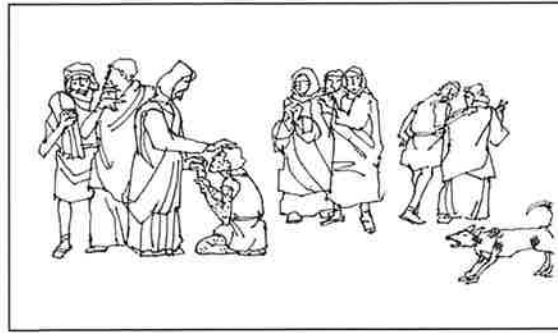
②2分間沈黙し、神が私たちに語りかけてくださる言葉に、耳を傾けましょう。

③あなたの心に個人的に響いたみことばは何でしたか。  
自分が選んだ単語、あるいは聖書の節が、なぜ心に響いたかを、互いに話し合ってみましょう。

イエスは社会から抑圧され、貧しく、見捨てられて、何のとりえもないと思われていた人たちを、神の子どもとして迎え、救うためにこの世に来られました。

また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自

由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができな  
いから、あなたは幸いだ。正しい  
者たちが復活するとき、あなたは  
報われる。」(ルカ14・12・14)



【参考聖書】

- \* マタイ 11、2・6・見捨てられた人たちのために来られたイエス
- \* ルカ 7、11・17・再び生き返った寡婦の息子
- \* ルカ 17、11・19・重い皮膚病患

者10人

\* ルカ 18、35・43・エリコの盲人

C. さらに一歩進んで

旅をつづけよう

私たちの周りには、貧しく、世の中から見捨てられたような人たちがたくさんいます。私たちは彼らを通して、イエス様に出会い、イエスさまの愛を分かち合うことができます。イエス様は神の子供である私たちが、そのような人たちと共にいることを求めておられます。

【進行係】(参加者たちに質問をする)

- ① 社会から見捨てられた人々たちを訪問した体験がありますか？  
お互いに話してみましよう。
- ② カトリック教会は、多くの社会福祉活動をしています。主の愛を現わすため、私たちにできる奉仕の計画を立ててみましょう。

【進行係】『主の祈り』を一緒に唱えて、集いを終わります。」

【進行係りの心得】

疎外とか差別をとり扱う場合、最大の注意が必要です。気づかないうちに自分をその人たちとは別世界の者、その人たちに恵みを与えてあげるといふ行動をとってしまふ場合があります。

【覚えましょう】

35. イエスはどのような生活をされましたか。  
\* イエスは30才のころ救い主として公の活動をはじめました。約3年間、神のみ言葉を宣べ伝え、33才で亡くなりました。
36. イエスはどんな人々と親しく過ごされましたか。  
\* とくに貧しい人、社会から見捨てられたような人々と親しく過ごされました。

37. イエスの弟子は何名ですか。  
\* イエスは弟子たちの中から12名を選び「使徒」と名づけられました。

12使徒の名は、ペトロ・アン  
ドレア・ヤコブ・ヨハネ・フィ  
リポ・バルトロマイ・マタイ・  
トマス・アルファイの子ヤコブ・  
タダイ・シモン・裏切り者となつ  
たイスカリオテのユダです。

38. 典礼暦とは何ですか。  
\* 教会のカレンダーです。  
教会は1年を周期としてキリストの神秘を記念します。その神秘の頂点は復活祭です。その始まりはキリストの誕生ですから、典礼暦もそこから始まり、復活というクライマックスに至り、主日ごとに、これを記念する形になっています。1年は①待降節、②降誕節、③四旬節、④復活節、⑤年間に分けられます。

39. 守るべき祝日とは何であり、いつですか。  
\* 信者の義務として、ミサにあずかり記念すべき祝日です。  
日本の教会における祝日は、すべての主日(日曜日)、主の降誕の祭日(クリスマス)、そして神の母聖マリアの祭日(1月1日)です。



# 「2000年の歴史における 教会像の変遷と司祭の使命」(3)

森 一弘

(東京教区司教)



- 第37号
  - ④ 派遣の普遍性
  - ⑤ 派遣される者たちの資質の問題
- 2. 教会からの派遣：ミッション
  - 第1ステップの教会像
  - 第2ステップの教会像
- 第38号
  - 第3ステップの教会像
  - 第4ステップの教会像
- 第39号
  - 第5ステップの教会像
  - 第6ステップの教会像
  - 第7ステップの教会像

## 第3ステップの教会像

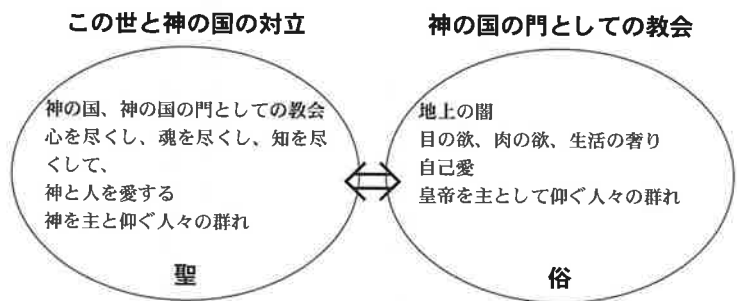
これは、ローマ帝国からキリスト教が公に承認された時期の教会像を指しています。これまで地下活動を余儀なくされて、隠れた形でしか集まれなかった教会が、地上に聖堂を建てることのできるようになり、公に活動できるようになります。

社会の一員になることが出来たと同時に、自分たちはこの社会の人たちとは違うんだ、という自覚も芽生えてきます。その自覚が「教会は神の国の入り口、神の国の門」、という表現を生み、「この地上の国と神の国の違い」という二元論が明確に出てきます。

これを神学的に裏付けようとして頑張ったのが、アウグスチヌスです。彼は亡くなる前に「神の国」という膨大な著書を著しましたが、教会とは神の国だと言い、そこを支配している論理は「愛の論理、神と人を共通して愛することだ」と主張します。

逆に地上の国の論理は欲の世界であり、自己愛の論理であり、皇帝を主と仰ぐ人たちの世界であり、こうして聖と俗という概念が、明確に教会の中に出てきます。

この時期に、ネオプラトニズムと結びついて、「この世界に背を向けて、神の方にのみ、ひたすら心を向けて生きようとして」共同生活をすすめる、修道生活を志す人たちのグループ



プが出てきます。この第3のステップのあたりから、徐々に教会の「教」が強調されるようになってきます。異端思想も出てきます。

それまでは地下活動でしたから、異端どころではなく、弾圧にどう対処するかということで精一杯でした。しかし、教会が公に認められて、それぞれの共同体に、それぞれの信仰生活が許されるようになったとき、共同体のなかに、さまざまなキリス

ト理解が出てきます。キリストを主と仰ぐ人々の世界に、福音書のどれが本物かという正典・偽典の問題が出てきます。いわゆる路線争いの出現です。

また、様々な異端が出てきて、問題解決のために、ニケア公会議(325年)が開かれ、カトリック教会の正統な教えの枠組みを明確にした信仰宣言がきちんと作られることとなります。ニケア信仰宣言です。

教会の一員であると認められるためには、信仰簡条を認めるか認めないかということが条件となります。この、教会は神の国すなわち聖なる区域への入り口であるというメンタリティーと、教義というものを軸にした、共同体の信仰宣言とが、後の教会共同体のあり方を強く縛るようになってきます。

教会の底には、どのような時代にも通用する神の愛が、共同体を支配するのが本当であるはずなのですが、教義によって共同体の選別が始まりますと、排除の論理が前面に出てくる恐れがあります。

教会の教義が排除の論理と結びつき、異端を厳しく糾弾し排除しようとする流れも教会の中に目立つようになります。

最近の教理省から出された文書の、カトリック教会だけが使徒継承の正

統な教会であるというような表現は、各方面に少々違和感をもたらしただけです。ルーテル派の先生たちにしてみれば「だけ」という表現は、正統と異端の二元の論理であり、カトリック教会からみればそうかもしれないけれども「だけ」と言われると、自分たちが排除されてしまうような印象を受け、残念だという方もおられます。

ルーテル派や日本キリスト教団の洗礼の有効性の問題にも関わってきます。キリストに繋がっているということの基本にすれば、別の表現もありえたのではないかとということですが。彼らの立場からすると、もっとふさわしいデリケートな表現があってもよかつたのではないかと、いうことになります。

教会の原点には、あらゆる喜びと希望、苦しみと悲しみの中で生きる人間に対する、神の心の優しさがあり、そこは決して見失ってはならないと思います。教義の正しさや理解を超えた、人間の生きざまへの、神の深いかわりです。それが教会の本質だと思えます。

#### 第4ステップの教会像

ローマ帝国が減び、カトリック教

会がヨーロッパ各地にひろがって行き、キリスト教化が進み、キリスト教がヨーロッパの統合の要になった時代が、第4ステップです。

この時代の、カトリック教会のシンボリックな建物が、ゴシック建築だと思えます。大理石が積み重ねられ、塔の先端は高い所を指差しています。

それと同じように、地上のすべての営みは、教会を通して神に結び付けられ、天上からの神の恵みと祝福は、教会を通してこの世界に注がれるという考え方です。このことは、教皇は王の王となり、すべての地上の営みを支配し、天上と地上の権威の鍵を持っているという神学につながります。

第4ステップの教会像というのは、正直に言うと、今でもわたしたちの中にも生きておられると思います。

辺見庸という作家がいますが、私に彼に出会ったのは14年前でしたが、勉強会のように彼は「私はキリスト教は嫌いだ」と言ったことがありません。9・11事件のあとです。なぜならキリスト教の十字軍派遣の時も、アメリカのブッシュのイラク戦争の時も、教会の牧者の祝福の下で行われている。人を愛しなさいと言いつつながら、その宗教の中身は金と権力とに結びついている。そういう恐ろしさというものが、まともには出

てきている。そういうイメージが彼の頭の中にあつたわけです。

後で述べる、第6ステップのような教会像のなかで記すような、ヨハネパウロ2世の謝罪はまだ届いていませんでしたので、言われても仕方のない面もあると私は受け取りました。

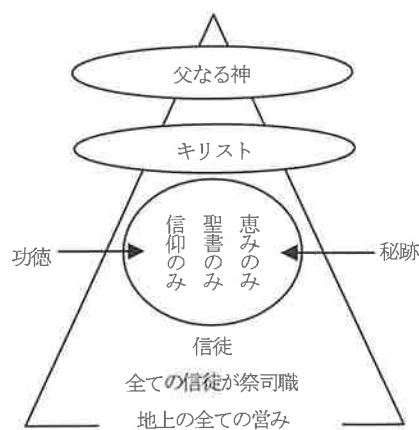
私の心の中では、ある部分では彼の言い分を認めながらも、教会というのは2000年の歴史を貫き、そのキリストの心を受け継いで、どんなことがあるとも、どんな政治体制の中でも、キリストの愛を届けて、文化と社会生活を作りあげようとしている。その流れが生きているという確信があります。

教会はまだ確かな光をもっており、現代社会に伝えるべきものを豊かに持っている。現代社会や一般社会にはないものが、教会の中にあると確信しています。

これがどのように展開したかは後で述べますが、これがまさに第二バチカン公会議で出て来るわけです。第4ステップはそこに至る前の教会の姿です。

第二バチカン公会議が、長い間につちかわれた教会の体質にメスを入れ、キリストという原点に帰ろうとしたことは、確かに聖霊の導きだつたと感じます。同時にその聖霊は、

特に私たち司祭の体質改善をも促していると思えます。



## 大司教談話室

③

## 人生の大転換

主イエスによって  
変えられたパウロ

Q. キリスト信者を迫害することは神のみ旨であると同様で確信していたパウロが、なぜ「キリストの使徒とされた」と自覚し、「福音のためなら、どんなことでもします」と言い切り、殉教にまで至ったのでしょうか？彼に何があつたのでしょうか？

A. 1・2・3面を補完する意味を込めて述べさせていただきます。周知の通り、パウロが、キリスト信者の「男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するため」（使徒9・2）にダマスコに近づいたとき、復活したキリストが彼に現れました。そこからすべてが変わりました。彼は、恵みの光りを受け、本質的なことが徐々に明らかに見えるようになったのです。それは、すべてがキリストの目と同じように見えたからにちがいありません。こうして、彼は見たことを証しする使命を与えられたのでした。

(1) パウロの中で大きな変化が生じました。すべてが明らかに見えるようになったのです。

① 彼の変化は一瞬のうちに起こったわけではないようですが、ダマスコへの途上の復活した主イエスの出現が彼を根底から覆したの事実です。その時パウロは主に出会い、主に語りかけられ（使徒9・27、22・14）、主を見たのです（26・16）。

② 「天からの光り」が彼の周りを照らし、その光りを見ました（使徒9・3、22・6、26・13参照）。光りは彼の知恵と心を照らし出したにちがいありません。

③ 天からの光りを受けた後、視力を失いましたが、アナニアが彼の上に手を置くと「聖霊に満たされ」、うろこのようなものが落ちて見えるようになります（使徒9・8、17・18、22・11、13参照）。しかし、実際は真の開眼でした。

④ その後数日間ダマスコでイエスが「神の子」であると宣べ、アラビアに退きました。その時以来（使徒22・17、18、26・19、20・二コリント12・1、7）、キリストから福音や神の計画を示され（ガラテヤ1・11、12・エフェソ3・3、4）、神から御子を示されました（ガラテヤ1・15）。パウロは啓示を受けたのでした。

(2) サウロには何が見えたのでしょうか？

① 「わたしは：イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていた」（一コリント2・2）と言っているように、パウロにとって、イエスの十字架上の死がすべてを明らかにします。十字架のキリストは、ユダヤ人にはつまみかせるもの、ギリシア人には愚かなものですが、誰であれ召された者には、神の力、神の知恵で

す（1・23、24）。「わたしたちがまだ罪人であつたとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」（ローマ5・8、9。ガラテヤ1・4参照）「死も、命も、：わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（ローマ8・38、39）② 「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる。：わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」（ガラテヤ2・16、20ほか参照）、まず救いの恵みがあるのです。

③ 洗礼によってキリストと結ばれる者は新しい被造物です（ローマ6・4、二コリント5・17、ガラテヤ5・16、6・15）。民族や男女や身分などの区別を超えて一つとなる（ガラテヤ3・27、28、ローマ10・12、コロサイ3・9、11）つまり、キリストのからだである教会を構成します（一コリント12・12、26）。主が、パウロに「あなたが迫害しているのはわたしである」と言われた所以です（使徒9・4ほか）

(3) パウロの祈り（エフェソ1・17、19、3・14、21ほか）によって、「心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なこゝとであるかをわきまえ」（ローマ12・2）、聖霊に導かれた生き方をめざしたいものです。

(高見三明)





# 永井隆博士 と 摂理

今年、永井隆博士の生誕百周年にあたります。そのために、去年から今年にかけて、カトリック長崎大司教区、長崎市だけではなく、全国各地でも、博士の偉大な業績を称えるために、いろいろな記念行事が盛んに行われています。

わたし自身も、去る2月10日、「正義と平和推進部会」のメンバーの協力のもと開催しています、恒例の教皇の「世界平和メッセージ」についての講演会の前に、作曲家・指揮者の小畑郁男先生にお願いして、博士の著作から抜粋した言葉の作曲と、そのコンサートをお願いしました。このコンサートには、お告げのマリア修道会と、純心聖母会の修練女たちが合唱を、バリトン独奏を鹿児島大学の斉藤拓教授が、ソプラノ独奏を活水女子大学の福地友子先生、そしてピアノを純心大学の有馬史先生がそれぞれ担当してくださり、ブリックホール中ホール満席の聴衆に、深い感動のうちに、博士を偲んでいただきました。

わたしもこの機会に、博士の著書と関係書を読み直しました。永井の中心的思想の一つは、「原爆投下は神の摂理であった」、とするかれの発言です。したがって永井の批判者たちは、例外なくこの問題に鋭い批判の矛先を向けています。永井の、原爆投下を神の摂理とする発言は、戦争責任追及を求める人々の口を封じるための詭弁であるとか、故ヨハネ・パウロ二世教皇が広島で、「戦争は人間の仕業である」、と宣言されたことと矛盾するなど、厳しい非難にさらされています。

わたしはこのような批判に答えるべく、「摂理論」を中心に、彼の思想を少しでも解明しようと

思い、小さな研究を続けています。早速結成された実行委員会の全面的協力によって、「永井隆博士の思想を語る」と題して、三回の講演会が企画され、第一回講演が、8月3日、長崎市立図書館多目的ホールで開催される運びとなりました。しかしわたしは、永井の著書を読み進めるうちに、「摂理」についての神学的・抽象的論争が、なんとなく空しく感じられるようになりました。永井にとって神の「摂理」は、もはや哲学的・神学的論争の対象ではなく、かれの信仰そのものであることを実感させられたからです。わたしは、「摂理は無条件に受け入れて、忠実に生きるべきではないのか」と囁く、博士の小さな言葉が背後から聞こえるように思えてなりません。

くしくも今年、この長崎の地で、ペトロ岐部と187殉教者の列福式が行なわれます。殉教者たちも例外なく、計り知れない神の神秘的な摂理への絶対的な信頼を、死に至るまで生き抜いた方々です。永井博士生誕百周年と殉教者たちの列福式が、今年、この長崎の地で行なわれることが、わたしにはどうしても偶然とは思えません。これこそは、現代社会に生きているわたしたちに、信仰の大切さを再確認させ、わたしたちの子孫にもしっかりと伝えるようにとの、神の「摂理」ではないでしょうか。この意味でわたしたちは今年を、信仰生活の刷新と、宣教活動への力強い再出発の年としたいものです。

(長崎大司教区司祭 山内清海)



# 「殉教者を出さない社会」

カトリック長崎大司教区  
正義と平和推進部会  
事務局長 吉村正寿

(一)



「長崎の教会は社会問題に無関心だ」ということを言われます。特に教区を揚げて熱心に社会問題に取り組んでいるところから、このような言葉をよく聞きます。長崎の教会を考えたときに、確かにそのように取られても仕方がないと思われることもあります。しかしこれは、長崎の教会の歴史を考えたときに、教会の取る行動としては当然の結果です。

フランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教を伝えて以来、日本の時の権力者たちは、あるときはキリスト教を厚遇し、領地まで与え、またあるときは迫害し、多くのキリスト者を国外に追放し、国内に

おいて処刑しました。特にこの長崎では日本26聖人を始め多くの殉教者が、権力者の差別によって、自らの命を神に捧げることになりました。権力者によるキリスト者への激しい弾圧は続きますが、キリストの教えを棄てられないものたちは、潜伏し教えを守り続けました。何度も訪れた「崩れ」にも堪え、禁教の高札撤廃以降、やっとキリスト教を信仰することで迫害を加えられることのない時代になりました。しかし、キリスト者に対する差別は消えることはありませんでした。第二次世界大戦が始まり、広島と長崎に原子爆弾が投下され、戦争は終わりますが、浦上に投下された原爆によって、キリスト者への差別に被爆者への差別が加わり、二重の苦しみを負うこととなります。長崎のキリスト者の取った行動、すなわち、「祈り」は、自分たちを治める神への忠誠と、キリストを知らない社会からの差別に対する、平和的な解決方法だったと考えることが出来ます。

本当に長崎の教会は、社会問題に無関心だったのでしょうか。信徒発見時、長崎を司牧したパリ外国宣教会は、さまざまな社会活動を行っています。厳密に言えば福祉活動と社会問題への取り組みは区別されますが、マルコ・マリ・ドロ神父は、外海地区の住人の生活向上のために産業を興し、福祉施設を建てました。ドロさまそうめんなどは、そのときの製品が今に伝えられているものです。パリ外国宣教会と時を同じくして来崎した女子修道会も、社会福祉事業や幼児教育に力を入れ、今もその任に当たっています。長崎の教会は福祉、教育、医療の現場で、どこよりも早く社会問題に取り組み、成果を挙げてきました。ドロ神父はじめ、長崎の教会が行ったことこそ、本来は行政の役目ですが、富国強

兵の明治政府にとって、社会問題は手の回らないことでした。長崎の教会は社会問題に決して無関心ではなく、目立たぬように、深く自然に、社会に浸透している活動を行っていると思います。

(二)

列福式が行われる今年、六月十四日カトリックセンターにおいて、日本カトリック部落問題委員会の主催で「シンポジウム2008 国家と差別」が開催されました。サブタイトルは「殉教者を出さない社会」。日本カトリック部落問題委員会委員長の平賀徹夫司教（仙台教区司教）の司会で、デ・ルカ・レンゾ師（日本26聖人記念館館長）、藤原正寿氏（浄土真宗僧侶、真宗大谷派教学研究所所員）、溝部脩司教（高松教区司教）、列聖列福特別委員会委員長の3名のシンポジストのお話を窺うことが出来ました。



①レンゾ師は、「差別とキリシタン殉教者」というテーマで、宗教を根拠にした差別が、人間の歴史にもよく見られる現象であること。宗教が、そのものに差別がなくとも差別のために利用されやすいものであること。などを挙げられ、殉教者が、その差別に対する答えを出したことを、お話しになられました。その答えとは、暴力を暴力で返さない、暴力に

屈服しない、相手のために自分自身が損をしてもよい、庶民的な正義感の普遍性、屈辱を説教台に変える、区別・差別を超えた共同体の力の発現、を示されました。秀吉時代から江戸初期までの、キリシタン殉教者の資料を紐解きながら、非暴力で権力者による差別と抗った、先人のメッセージに触れることが出来ました。



②続いて藤原氏が、仏教でありながら、真宗も国家による差別の対象であったと前置きされた後、氏のご著書でもあった「キリシタンが見た真宗」をテーマに、異なった宗教間における共生のまなざしが、キリスト教と真宗の間に垣間見えることをお話しになりました。それは、当時の宣教師たちがヨーロッパに書き送った膨大な資料の中に、真宗（一向宗）の記録が数多く含まれていることを例にとり、日本にある異なった宗教、あるいは、いろいろな考え方を持つ人間が、その時代の社会と共に生きていくための立場を、どこに獲得するかが、大切な視点として窺うことが出来ることをお話になりました。宣教師のまなざしを通して当時の一向宗の念仏に生きる人が、どのように描かれていたかを確かめることによって、両者に通底する基盤を見ることが出来れば、そこに宗教間の争いが覆っている現状において、対話を成立させる大事な視点があるとされました。



③最後に溝部司教が、「殉教者が伝える現代へのメッセージ」レオ税所七右衛門と信教の自由をめぐって」と題してお話になりました。最近新聞紙上を賑わしている、政教分離や信教の自由という問題が、決して新しいものではなく、日本のキリスト教会にとつて常に存在し、最大の課題であったことを殉教者を通して分かりやすく解説していただきました。

日本の土壌に土着化すべく、努力を行った日本の教会であったが、一神教ゆえに神の意思が絶対であり、国家や為政者に従うことが出来なかつたために排斥されてきたこと、日本が掲げる「国是」が迫害の真の理由であると述べられていることを切り口に、現代社会が何を「国是」として選ぶようとしているのかによって、キリスト教にとって大きな問題になりえることを指摘されました。

(三)

現代社会においても、国家による差別は確実に存在します。私たちが知らないうちに、巧妙に法律の中に差別を潜ませています。医療保険の制度やワーキングプアといわれる問題も差別が根底にあります。社会問題をよく知り、社会問題に取り組んできた、長崎の教会だからこそ、今一人一人が日本の社会を見つめなおし、かつ、祈りと共に行動する

必要があると思います。国家による差別と、非暴力で戦ってきた188人の殉教者が、私たちに明確なメッセージを送っています。キリストの愛を知る人による、社会問題の解決こそが、神の国の建設につながるのだと信じてます。このシンポジウムを開催していただいた日本カトリック部落問題委員会に感謝し、ご報告とさせていただきます。



# 生活教会 の中の



浦上教会

フォトプラン 山本 富夫

## 信仰の記憶

浦の上の丘に建つ教会堂。  
その信仰の記憶は四百数十年  
余に及ぶ。

始まりは、長崎の開港頃。  
一五八四年、イエス会の  
知行地となり、やがて、浦  
上の四つの郷は、全農民が  
キリシタンになったという。  
江戸期には度重なる迫害、  
明治始めには三千三百余人  
が総流配。

旅の後、「土井」の聖堂、  
高谷家屋敷跡の聖堂、一九  
一四年完成の旧教会堂。被  
爆の全壊を乗り越え、一九  
五九年に新聖堂を建立。そ  
して教皇来崎に合わせ改修。  
人も聖堂も信仰も幾多の  
苦難を乗り越え、丘の上で  
凜としている。